

# 習近平時代における大陸交流 台湾人学生のライフプラン追跡調査\*

王 嘉 州

(台湾・義守大学公共政策與管理学科教授)

## 【要約】

中共にとって「ひまわり学生運動」で離れた台湾の青年層の心を取り戻すことは、すでに対台湾政策の主要な目標となっており、兩岸交流を通して大陸志向を伸ばすという戦略が生み出されている。そのため、大陸での経験が台湾の学生のライフプランにどのような変化をもたらすかが、兩岸関係研究の新たな重要テーマとなりつつある。本論文では、2016年の夏期・冬期長期休暇を利用して、大陸での交流団に参加した台湾の学生を対象とし、追跡調査の手法と社会的接触・合理的選択という理論的基盤を用いて、ライフプランの変化とそれに影響を与える因子を分析した。本研究では、大陸での交流経験を経た台湾の学生が、大陸を人生設計の舞台として組み込もうという願望について1～4点の点数評価を用いた場合、平均0.14の有意な増加がみられた。またその願望は学生の22.10%で希薄な方に、52.89%で強い方に転じ、25.00%が変化なしであった。本論文で導かれた回帰方程式は、この願望の変化の程度が22.71%の変異を説

---

\* 本論文は、中華民国科技部の特定領域補助（計画番号 MOST 105-2410-H-214-002-MY2）の助成を受けたものである。

明できている。さらに、男性で中国大陸へのイメージが良く、大陸市場への自己評価利益が高い者ほど、この願望が強かった。

**キーワード：**ひまわり学生運動、兩岸関係、社会的接触、合理的選択

## 一 はじめに

2014年3月に台湾で起こった「ひまわり学生運動」の結果、「兩岸貿易サービス協定」の調印はされたものの未だ施行にいたっていない。この運動以来台湾の青年層は、中国共産党（以下中共）による対台湾政策の主要な対象となった<sup>1</sup>。中共が台湾の青年層に対して行った交流の方法の一部は、夏と冬の長期休暇を利用して大陸を訪問するイベントを開催することであった。2015年の夏期休暇には、このイベントは観光型・実地学習型・学術討論型の三種があった。このうち観光型は以前から恒例のものであるが、残り二つは「ひまわり学生運動」後に新しく形成されたものである。どのタイプのイベントも兩岸の青年層の心をつなぐにあたって有利に働くが、観光型は大陸への印象を改めさせる、学術討論型は台湾の青年層の考え方を知る、実地学習型は大陸での成長を促すという副産物がある<sup>2</sup>。筆者の助手が2017年冬期休暇を利用して北京で参加したのは観光型のイベントであったが、大陸での就業・起業講座も日程に組み込まれており、中共が台湾青年層の大陸での成長を特に重視していることがうかがえる。このような交流経験は、中共が期待するように、台湾青年層のライフプラン変更と大陸での成長を成功させることができるのだろうか？

ライフプランとは、ある個人が人生のイベントを適切に配置することであり<sup>3</sup>、自らの能力と価値観を実際の環境から来る需要とすり

---

<sup>1</sup> 陳鍵興「習近平總書記會見宋楚瑜一行」『新華網』2014年5月7日、[http://news.xinhuanet.com/politics/2014-05/07/c\\_1110577861.htm](http://news.xinhuanet.com/politics/2014-05/07/c_1110577861.htm)。

<sup>2</sup> 王嘉州「中共推動兩岸青年交流政策評析」『亞太評論』第1卷第6期（2015年11月）、頁90。

<sup>3</sup> 張振成「生涯規劃與生涯發展」『諮商與輔導』第144期（1994年12月）、頁24。

合わせる連続的な過程である<sup>4</sup>。このプランニングが成功するか否かは、「我を知る」「彼を知る」「決断する」の如何によって決まる。「我を知る」とは自分の興味・能力・性格・価値観を把握すること、「彼を知る」とは政治・経済・社会的環境を認識すること、「決断する」とは情報を収集・分析・比較した後に、最適な決定を出すことである<sup>5</sup>。大学生はまさにライフプランの「とば口」におり、人生の選択肢は減ってはきているものの、まだ完全に固まってはいない<sup>6</sup>。そのため、大陸経験は「彼我を知る」状況を変えるだけでなく、「決断」を促すことになる可能性もある。『聯合報』では、台湾の青年層と中国大陆に関するライフプランとして、現地での就学・勤務または起業・長期居住・現地人との結婚の四つのステージを挙げている<sup>7</sup>。諸文献から、本論文ではそれに「現地人と恋愛関係になる」という一項が加えられると考えている。これまでの研究から、大陸経験による台湾人学生のライフプラン変更は、中台統一／台湾独立への考え方に顕著な影響を与えることがわかっている。大陸との交流後、現地での就学意欲が強くなるほど台湾独立を強く志向し、現地人との恋愛・結婚への意欲が強くなるほど台湾独立から距離を置くようになる<sup>8</sup>。

---

<sup>4</sup> 黄惠惠『我的未來不是夢：生涯發展與規劃』（臺北：張老師，2004年）、頁56。

<sup>5</sup> 張添洲『生涯發展與規劃』（台北市：五南圖書，1993年）、頁161-162。

<sup>6</sup> Donald E. Super, "A life-span, life-space to career development," In D. Brown, L. Brooks, and Associates, eds., *Career choice and development* (2nd ed.) (San Francisco: Jossey-Bass, 1990), pp. 197-261.

<sup>7</sup> 聯合報系民意調查中心「兩岸互動16年 台灣青年關鍵7變」『聯合報』2016年11月20日、<https://udn.com/news/story/10599/2117317>。

<sup>8</sup> 王嘉州、劉羿朋「交流化獨或煙火效應？赴陸臺生統獨立場之持續與變遷」、發表於「民主與治理的挑戰」研討會（地點：臺灣政治學會、國立金門大、2015年11月14-15日）、頁14-15。

上記の研究は兩岸関係研究において先駆けとなるものであり、主にデータ収集の困難さから、今のところ他にこれに類する研究はない。しかし以上から、台湾の学生が大陸に渡ったことによってどのようにライフプランが変化するかは、兩岸関係研究の重要なテーマであると言える。ただ、上記の研究で対象にしていたのは現地での就学と兩岸にまたがる恋愛・婚姻の三点であり、勤務または起業と長期居住については触れていない。また、ライフプランを独立変数と見なしていたため深い分析を欠き、その変化に影響を与える因子の分析もしていなかった。さらにサンプルは23しかない初歩的な研究と言えるもので、引き続き磨きをかける必要があった。そのため、本論文では2016年に大陸への交流団に参加した台湾の学生を研究対象として追跡調査を行い、ライフプランの変化とそれに影響を与える因子の分析を行う。

## 二 先行文献分析と仮説設定

本論文のテーマは、大陸経験が台湾の青年のライフプランに影響を与えたかどうかを見ることである。その理論的背景となるのは、社会的接触理論と合理的選択理論である<sup>9</sup>。以下ではそれぞれの理論がライフプランに与える影響を検討し、研究上の仮説を提出する。

### 1 社会的接触

大陸に渡って交流を行うことは、二つの異なる社会のメンバーが接触する機会である。社会的接触には、偏見をなくすことと強くす

---

<sup>9</sup> 上記以外にも、強調感性因子による社会的アイデンティティ理論を取り入れる可能性はある。だが本論文ではそれについて検討する紙幅がない。

ることのどちらももたらすことがある<sup>10</sup>。接触が繰り返されることで、個人への偏見やエスニック・グループへの差別を減少させることができる<sup>11</sup>。接触は彼我の間に親愛の情を築き、差別や敵視を少なくさせることができる。そのため、異人種の友人を持つ者は、人種差別の現象が比較的起りにくい<sup>12</sup>。接触によって良好な結果を得るのに最も貢献する条件は、次の五つに帰着する。二つの集団の地位が平等であること、共通の目標があること、集団の間に協力関係があること、政府から支持されていること、潜在的な親愛の情があることである<sup>13</sup>。

友人と肉親は「知悉性接触 (true acquaintance)」の主要な対象である。相互に信頼と理解があるため、偏見を減少させることが比較的易しい<sup>14</sup>。兩岸交流で相手の善意を感じることで、理解のための共感を生み出すことができる。交流を通じて相互に信頼が生まれ、連系のネットワークが打ち立てられるからである。例えば大陸から短期交流のため来台した学者は「もし私が台湾人だとしたら、私も今の状況では統一してほしくない」と述べた<sup>15</sup>。一方、他人や友人の友人

---

<sup>10</sup> Gordon W. Allport, *The Nature of Prejudice* (Cambridge, MA: Addison-Wesley, 1954), pp. 3-7.

<sup>11</sup> Daniel A. Powers & Christopher G. Ellison, "Interracial Contact and Black Racial Attitudes: The Contact Hypothesis and Selectivity Bias," *Social Forces*, Vol. 74, Issue 1 (September 1995), p. 205; Thomas F. Pettigrew, "Intergroup Contact Theory," *Annual Review of Psychology*, Vol. 49, Issue 1 (February 1998), p. 71.

<sup>12</sup> Jürgen Hamberger & Miles Hewstone, "Inter-ethnic Contact as a Predictor of Prejudice: Tests of a Model in Four West European Nations," *British Journal of Social Psychology*, Vol. 36, Issue 2 (June 1997), p. 173.

<sup>13</sup> Thomas F. Pettigrew, "Intergroup Contact Theory," *Annual Review of Psychology*, p. 80.

<sup>14</sup> Gordon W. Allport, *The Nature of Prejudice*, pp. 263-268.

<sup>15</sup> 陳德昇、陳欽春「兩岸學術交流政策與運作評估」『遠景基金會季刊』第6卷第2期(2005年4月)、頁44-45、75。

など、よく知らない人物はすべて「偶然性接触 (casual contact)」の主要な対象であり、信頼と理解を欠くため、偏見が助長されやすい<sup>16</sup>。メディアによる一面的な報道のため、台湾の大部分の大衆は中国大陸では列への割り込み、ところ構わず痰を吐いたり大声で話したりするといったマナーの悪さが横行していると思っている。大陸からの観光が開放されたため、少数の観光客の言動を報じるメディアの記事がその認識を裏づける形となり、中国大陸にマイナスのイメージが刷り込まれることとなった<sup>17</sup>。

台湾の学生が大陸への交流団に参加する際は、航空券とビザの費用は自腹だが、現地滞在中の食事・宿泊・交通費や見学費はすべて中国政府持ちである。対応するスタッフも、台湾の学生が我が家に帰ったかのようにくつろげるよう努力している<sup>18</sup>。このようなもてなしは「知悉性接触」であり、学生たちが抱いていた中国大陸への悪印象を変えるのに有利だと予測される。また、空前の発展を遂げた中国経済に驚愕するなど、自分の目を見たものから変化が起きるかもしれない。どちらの経験も中国大陸に対するイメージを変え、大陸をライフプランの舞台として組み入れようという、大陸での成長願望を高める可能性がある。そこで次の仮説を提出する。

仮説 1 交流の際に中国大陸へのイメージが良好だった者ほど、大陸での成長願望が強い。

---

<sup>16</sup> 王嘉州「來臺陸生統一態度變遷初探—政治社會化途徑與定群追蹤法之分析」『臺灣民主季刊』第9卷第3期(2012年9月)、頁104。

<sup>17</sup> 楊開煌、劉祥得「社會接觸及政治態度影響臺灣民眾對大陸印象、認知、政策評估之分析」『遠景基金會季刊』第12卷第3期(2011年7月)、頁50。

<sup>18</sup> 王嘉州、李侑潔「赴陸交流對臺灣學生統一一意願之影響」『社會科學論叢』第6卷第2期(2012年10月)、頁22-23。

## 2 合理的選択

社会的接触理論が学習によるライフプラン変更を主張するのに対し、合理的選択を採る学派は「自己利益の最大化 (self-interest maximization)」を強調し、ライフプランは利益を基礎において深謀熟慮した末に選択されるものであると主張する<sup>19</sup>。合理的選択理論は、行動を起こす者はすべて自分の好みがあり、それらを配列・取捨できると仮定している<sup>20</sup>。そしてその好みは、制度や社会構造の中から生まれてくるという。なぜなら制度が選択肢を限定し、個人的利益の提示をもするからである<sup>21</sup>。また個人的利益は他人との関係、すなわち社会構造の中での位置から決定される。自己利益は自我を中心においた物質的なものであり、短期ないし中期に及ぶ個人的行為を決定する<sup>22</sup>。自己評価利益 (self-interest)こそ、合理的選択が政策に影響すると主張する核心にある概念である<sup>23</sup>。

兩岸の経済・貿易についての議題上、調査対象に「もし政府が兩岸経済・貿易を完全に開放したら」という質問を行った場合、自己評価利益として実際に用いられる定義は、その各自の経済状況への

---

<sup>19</sup> 陳陸輝、耿曙、涂萍蘭、黃冠博「理性自理或感性認同？影響臺灣民眾兩岸經貿立場因素的分析」『東吳政治學報』第27卷第2期（2009年6月）、頁93-94。

<sup>20</sup> William H. Riker, "The Future of a Science of Politics," *American Behavioral Scientist*, Vol. 21, No. 1 (September/October, 1977), p. 33.

<sup>21</sup> Keith Dowding and Desmond King, eds., *Preferences, Institutions, and Rational Choice* (Oxford: Clarendon Press, 1995), p. 2.

<sup>22</sup> David O. Sears, Richard R. Lau, Tom R. Tyler and Harris M. Allen, Jr., "Self-Interest vs. Symbolic Politics in Policy Attitudes and Presidential Voting," *American Political Science Review*, Vol. 74, No. 3 (September 1980), p. 671.

<sup>23</sup> Richard R. Lau and Caroline Heldman, "Self-Interest, Symbolic Attitudes, and Support for Public Policy: A Multilevel Analysis," *Political Psychology*, Vol. 30, No. 4 (July 2009), pp. 513-516.

影響についてである<sup>24</sup>。ほかにも点数方式があり、調査対象に「海峡兩岸サービス貿易協定」の全体的および個人的効果を評価してもらうことを行っている<sup>25</sup>。上述のような評価項目は、台湾の青年にとってそれほど切迫した利害につながるものではなかったもので、本論文では大陸でのビジネス展開、あるいは就業を利害評価の指標とする。兩岸の経済関係が日増しに密接になってきていることは、台湾の人々の就職先選択にすでに影響を及ぼしている。中国大陸は台商（台湾ビジネスマン）による長年の巨額な投資があり、また起業地として台湾の青年層を引きつけていることから、2016年には現地での個人商工企業設立の規制が大幅に緩和された。その結果、台湾企業経営者の地理的範囲は26の省・市・自治区におよび、業種も二つから24に増えたという<sup>26</sup>。このような経済情勢と政策変更は、兩岸の就業市場、ひいてはそれに対する台湾の青年層の利害評価に影響を与えるであろう。

本論文では「1111人力銀行」が2015年に実施した「サラリーマンの大陸西進・台湾帰還アンケート」の結果<sup>27</sup>を参考に、台湾の学生に次の五つの側面から中国大陸における就職市場の利害を評価してもらった。すなわち、大陸市場の展望、自分の強みを活かせるか、立身出世のチャンス、高給を目指すこと、競争力の強化である。彼らが交流イベント終了後、自己評価利益が中国大陸での就職市場にお

---

<sup>24</sup> 陳陸輝、耿曙、涂萍蘭、黃冠博「理性自理或感性認同？影響台灣民眾兩岸經貿立場因素的 analysis」、頁120。

<sup>25</sup> 湯晏甄「『兩岸關係因素』真的影響了2012年的台灣總統大選嗎？」『臺灣民主季刊』第10卷第3期（2013年9月）、頁104-105。

<sup>26</sup> 潘薇、陳翠仙「個體戶條件鬆綁 臺商搶攻對岸內需財」『聯合新聞網』2017年1月26日、<https://udn.com/news/story/6867/2252303>。

<sup>27</sup> 「上班族西進大陸暨歸臺調查」『1111人力銀行網站』2015年2月25日、[http://www.1111.com.tw/news/surveyns\\_con.asp?ano=72895](http://www.1111.com.tw/news/surveyns_con.asp?ano=72895)。

いてより有利に働くとわかれば、自己利益最大化によって大陸での成長願望が強まることを予測する。そこで、本論文では次の仮説を提出する。

仮説2 交流経験後、自分が大陸の就職市場において有利であると認識した者ほど、大陸での成長願望は強くなる。

中国大陸へのイメージと、大陸市場への自己評価という二つの独立変数以外にも、出身（省籍）と性別も大陸志向に影響を与える可能性がある。本省人（台湾出身者）は中国大陸との関係のネットワークが少なく、当地へのアイデンティティも薄い可能性があり、比較的民進党を支持する一方、中国大陸には好感を抱いておらず、大陸での成長願望も比較的弱いと考えられる<sup>28</sup>。また中台統一／台湾独立への見方には性別による差異が存在する。男性は女性に比べ、明らかに利益を計算に入れて統一を支持する者が多い<sup>29</sup>。そのため、交流経験後の台湾青年層が中国大陸の就職市場に明るい展望を読み取ったとき、男性の方が大陸願望が強いことが予想される。このことから、出身と性別も本論文においてはパラメータとして考慮に入れることとする。

---

<sup>28</sup> 耿曙、曾于秦「中共邀訪臺灣青年政策的政治影響」『問題與研究』第49巻第3期（2010年9月）、頁55-56。

<sup>29</sup> 楊婉瑩、劉嘉薇「探討統獨態度的性別差異：和平戰爭與發展利益的觀點」『選舉研究』第16巻第1期（2009年5月）、頁58。

### 三 データの出自と各変数の測定

#### 1 データの出自

本論文では2016年の冬期および夏期休暇を利用して大陸を訪れた105名の台湾青年層（学生）を対象とし、各自二回のアンケート調査に答えてもらった。回答者は台湾から中国大陸に赴く機上で一回目の、交流イベント終了後台湾に帰るまでの間に二回目のアンケートに答えた。これらの結果を比較することで、交流前後の態度に変化が見られるかどうかを知ることができる。本論文で追跡調査対象となった105の固定追跡サンプルは、四つの交流団から得られたもので、交流期間などは以下の通りである

①「2016年冬期台湾青年・学生のための中華文化研修キャンプ」1月25日～2月1日（8日間）、北京。参加者27名全員にアンケート配布、全員が回答（回収率100%、以下同）、有効回答26名。②「2016年夏期台湾青年・学生のための中華文化研修キャンプ（北京）」7月18日～26日（9日間）、北京。参加者32名中30名にアンケート配布、27名が回答（90%）、有効回答22名。③「2016年夏期台湾青年・学生のための中華文化研修キャンプ（上海・湖州・蘇州）」8月25日～9月3日（10日間）、上海・湖州・蘇州。参加者45名全員にアンケート配布、42名が回答（93%）、有効回答42名。④「2016年夏期台湾青年・学生のための中華文化研修キャンプ（山東省威海・青島）」8月30日～9月7日（9日間）、威海・青島。参加者15名全員にアンケート配布、全員が回答（100%）、有効回答15名。

兩岸関係に関する問題はセンシティブであるため、回答を保留または拒否される可能性がある。忌憚なく回答できるよう、今回は匿名方式を採用した。回答者各自の電子メールアドレスを照合することで、任意の二回分のアンケート結果が同一人物によるものである

と認定する。有効回答を行った105名のうち、29.5%が男性、70.5%が女性であった。学歴では、62.9%が学部、21.9%が大学院修士課程に在学中、また10.5%が高校卒業直後、4.8%が学部卒業直後か大学院修了直後であった。ルーツ別では、台湾漢族85.7%、台湾客家7.6%、大陸3.8%、未回答2.9%となっている。出生年では民国80～87(1991～1998)年、18～25歳が全体の95.1%を占めた。戸籍は計17の県または市にわたり、北部(基隆・台北・新北・桃園・新竹・苗栗)27.6%、中部(台中・彰化・南投・雲林・嘉義)20.0%、南部(台南・高雄・屏東)50.5%、台東と金門各1%であった。

## 2 各変数の測定

本論文では、従属変数として大陸での成長願望の変化を、独立変数として中国大陸へのイメージの変化と中国大陸市場への自己評価利益の変化、以上三つの変数が測定される。それぞれの測定方法は以下の通りである。

### (1) 大陸での成長願望の変化

この変数に関するアンケート項目は次の五問である。「大陸で就学する意思がありますか?」「大陸で就業または起業する意思がありますか?」「大陸に長期居住する意思がありますか?」「大陸の人を恋人にしたいという願望はありますか?」「大陸の人と結婚したいという願望はありますか?」<sup>30</sup>。回答の選択肢は「非常に希薄」「希

---

<sup>30</sup> 「恋人どうし」は二つの個人的関係の進展とみることができ、同化理論のいう構造的同化(structural assimilation)にあたる。一方「婚姻」は二つの家族間関係の進展であり、「婚姻同化(marital assimilation)」にあたる。参考:Milton M. Gordon, *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins* (Oxford and New York:

薄」「強い」「非常に強い」の四種で、それぞれ1から4までの数が割り当てられているので、これらの数値が高いほど大陸願望が強いことになる。これら五問に対するクロンバックの $\alpha$ 信頼性係数は、一回目0.77、二回目0.86であった。回答の数値の平均をとることで、台湾の学生の大陸願望を読み取ることができる。また交流前後の変化は二回目の数値から一回目の数値を引くことで表せる。その差は-3から3の範囲にあり、正の数なら願望が強くなっているということである。

## (2) 中国大陸へのイメージの変化

この変数に対応する問題は「中国大陸の民衆へのイメージは良いですか、悪いですか?」「中国大陸の国家指導者へのイメージは良いですか、悪いですか?」「中国大陸全体へのイメージは良いですか、悪いですか?」の三問である<sup>31</sup>。この設問に対しても悪い方から「はなはだ良くない」「良くない」「良い」「非常に良い」の四つの回答が用意されており、順に1から4の数字を割り当てられているので、これらの数値が高いほど中国大陸へのイメージは良いことになる。クロンバックの $\alpha$ 信頼性係数は、一回目0.63、二回目0.69であった。回答の数値の平均をとることで、中国大陸へのイメージを読み取ることができる。また交流前後の変化は二回目の数値から一回目の数値を引くことで表し、その差は-3から3の範囲、正の数なら中国へのイメージがよくなっていることを表している。

---

Oxford University Press, 1964), pp. 70-71.

<sup>31</sup> この三問は台湾の学生による中国大陸への「偏見」が薄まったか強まったかを測るためのものである。もし薄まっているなら、社会的接触理論の「知悉性接触」の予測と符合するし、強まっているなら「偶然性接触」の予測と符合する。

### (3) 中国大陸市場への自己評価利益の変化

この変数を測定するための設問は「大陸市場の展望は明るい」「大陸での就業により、自分の強みを活かすことができる」「大陸での就業により、出世するチャンスがある」「大陸での就業により、より高いサラリーが望める」「大陸での就業により、競争力を強化することができる」の五問である。回答の選択肢は「非常に怪しいと思う」「怪しいと思う」「妥当だと思う」「非常に妥当だと思う」の四つで、同様に点数を割り当てて平均値をとると、最小1、最大4となる。これが大きいほど自己評価利益が大きいことになる。クロンバックの  $\alpha$  信頼性係数は、一回目 0.71、二回目 0.86 であった。交流前後の変化は二回目の数値から一回目の数値を引くことで表し、その差は-3 から 3 の範囲、数値が大きいほど自己評価利益が高くなったことを表している。

## 四 データの分析と考察

まずクロス分析表と棒グラフにより、従属変数である大陸願望の変化について述べ、交流経験後のライフプランに変化が見られたかをみる。続けて独立変数である中国大陸へのイメージと自己評価利益の変化を述べる。最後に回帰分析を用いて仮説検定を行い、独立変数の変化が従属変数に影響を与えているかをみる。

### 1 大陸での成長願望の変化

台湾の学生による大陸での成長願望が交流前後でどのくらい変化したかを、表1に整理した。まず大陸で就学する願望がある者の割合は、交流前の 58.09%と交流後の 71.43%を比べると、13.34%増加している。「非常に希薄」と答えた者が 0.95%から 1.90%に増える一方、「非常に強い」と答えた者も 5.71%から 10.48%に増えた。クロス分

析の結果、62.85%が交流前後で見方を変えていないことがわかる。その内訳は、20.95%が一貫して願望が希薄な者、41.90%が一貫して強い者である。37.13%が見方を変えた者で、内訳は26.66%が願望が強いに転じ、10.47%が希薄に転じた。

大陸で勤務または起業の願望がある者の割合は、交流前の71.43%と交流後の83.81%を比べると、12.38%増加している。「非常に希薄」と答えた者が1.90%から0.95%に減る一方、「非常に強い」と答えた者は11.43%から15.24%に増えた。クロス分析の結果、68.57%が交流前後で見方を変えていないことがわかる。その内訳は、10.48%が一貫して願望が希薄な者、58.09%が一貫して強い者である。31.42%が見方を変えた者で、内訳は23.80%が願望が強いに転じ、7.62%が希薄に転じた。

大陸で長期居住願望がある者の割合は、交流前の19.04%と交流後の39.05%を比べると、20.01%増加している。「非常に希薄」と答えた者が交流前後で8.57%と変わらないのに対して、「非常に強い」と答えた者は1.90%から4.76%に増えた。クロス分析の結果、59.04%が交流前後で見方を変えていないことがわかる。その内訳は、46.66%が一貫して願望が希薄な者、12.38%が一貫して強い者である。40.93%が見方を変えた者で、内訳は31.42%が願望が強いに転じ、9.51%が希薄に転じた。

大陸の人を恋人にしたい願望がある者の割合は、交流前の50.00%と交流後の53.85%を比べると、3.85%増加している。「非常に希薄」と答えた者が4.81%から7.69%に増える一方、「非常に強い」と答えた者は2.88%から6.73%に増えた。クロス分析の結果、70.19%が交流前後で見方を変えていないことがわかる。その内訳は、36.54%が一貫して願望が希薄な者、33.65%が一貫して強い者である。29.80%が見方を変えた者で、内訳は18.27%が願望が強いに転じ、11.53%が希

薄に転じた。

表1 中国大陸での成長願望の変化

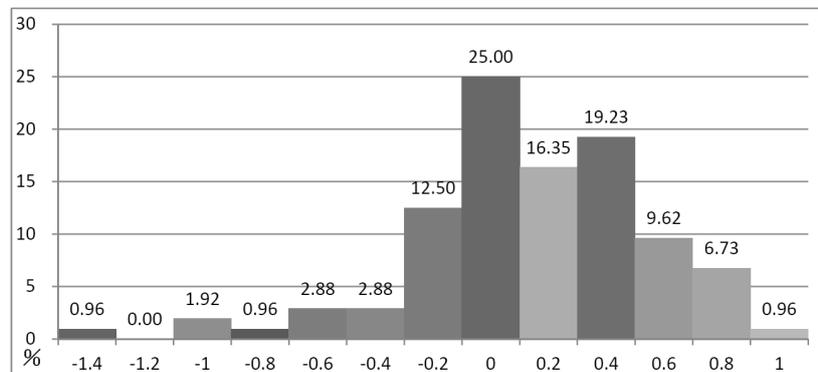
		交流前					
		非常に 希薄	希薄	強い	非常に 強い	合計%	
大陸での就 学願望	交流後	非常に希薄	1.90			1.90	
		希薄	0.95	20.95	4.76	26.67	
		強い		17.14	40.00	3.81	60.95
		非常に強い		0.95	7.62	1.90	10.48
		合計% (N=105)	0.95	40.95	52.38	5.71	100.00
大陸での就 業願望	交流後	非常に希薄			0.95	0.95	
		希薄	0.95	10.48	3.81	15.24	
		強い	0.95	15.24	49.52	2.86	68.57
		非常に強い		0.95	5.71	8.57	15.24
		合計% (N=105)	1.90	26.67	60.00	11.43	100.00
大陸で長期 居住願望	交流後	非常に希薄	0.95	5.71	1.90	8.57	
		希薄	5.71	45.71	0.95	52.38	
		強い	1.90	20.00	11.43	0.95	34.29
		非常に強い		0.95	2.86	0.95	4.76
		合計% (N=105)	8.57	72.38	17.14	1.90	100.00
大陸の人と の恋愛願望	交流後	非常に希薄	4.81	0.96	1.92	7.69	
		希薄		31.73	6.73	38.46	
		強い		12.50	32.69	1.92	47.12
		非常に強い			5.77	0.96	6.73
		合計% (N=104)	4.81	45.19	47.12	2.88	100.00
大陸の人と の結婚願望	交流後	非常に希薄	4.76	2.86	0.95	8.57	
		希薄	0.95	36.19	6.67	43.81	
		強い		13.33	26.67	1.90	41.90
		非常に強い			4.76	0.95	5.71
		合計% (N=105)	5.71	52.38	39.05	2.86	100.00

出典：筆者作成。

大陸の人と結婚したい願望がある者の割合は、交流前の41.91%と交流後の47.61%を比べると、5.70%増加している。「非常に希薄」と答えた者が5.71%から8.57%に増える一方、「非常に強い」と答えた

者は2.86%から5.71%に増えた。クロス分析の結果、68.57%が交流前後で見方を変えていないことがわかる。その内訳は、40.95%が一貫して願望が薄な者、27.62%が一貫して強い者である。31.42%が見方を変えた者で、内訳は19.04%が願望が強いに転じ、12.38%が希薄に転じた。

図1 台湾学生の中国大陸での成長願望の変化



出典：筆者作成。

説明：サンプル数 104。

上の五問に対する諸数値から、大陸への成長願望を構成することができる。一回目のアンケートによる数値の平均は2.49で標準偏差は0.45、二回目についてはそれぞれ2.63と0.55であった。二回のアンケートの各サンプルの平均からt検定を行うと、願望の平均は有意に0.14上がっている(p=0.001)。交流前後の平均点数の変化は図1にまとめており、平均は0.14、標準偏差は0.41である。横軸は理論的に-3から3までの値を取り得るが、実際には-1.4から1.0であった。この数字が大きいほど、交流経験によって願望が強められたことになる。図1からは、22.10%の学生が交流後に願望が弱く、

52.89%が強くなり、25.00%が変化なしということがわかる。まとめると、大陸訪問後、大陸願望がより強くなった学生は、より希薄となった学生より30.79%多かった。

## 2 中国大陸へのイメージの変化

台湾の学生による中国大陸へのイメージが交流前後でどのくらい変化したかを、表2に整理した。中国大陸の民衆へのイメージが良いと答えた者の割合は、交流前の46.66%と交流後の56.19%を比べると、9.53%増加している。クロス分析の結果、57.09%が交流前後で見方を変えていないことがわかる。残り42.85%が見方を変えた者で、内訳は25.71%がイメージが良いに転じ、17.14%が悪に転じた。中国大陸の国家指導者へのイメージが良いと答えた者の割合は、交流前の41.91%と交流後の54.28%を比べると、12.37%増加している。クロス分析の結果、69.52%が交流前後で見方を変えていないことがわかる。残り30.48%が見方を変えた者で、内訳は20.95%がイメージが良いに転じ、9.53%が悪いに転じた。最後に、中国大陸全体へのイメージが良いと答えた者の割合は、交流前の45.19%と交流後の71.15%を比べると、25.96%増加している。クロス分析の結果、52.89%が交流前後で見方を変えていないことがわかる。あとの47.10%が見方を変えた者で、内訳は37.49%がイメージが良いに転じ、9.61%が悪いに転じた。

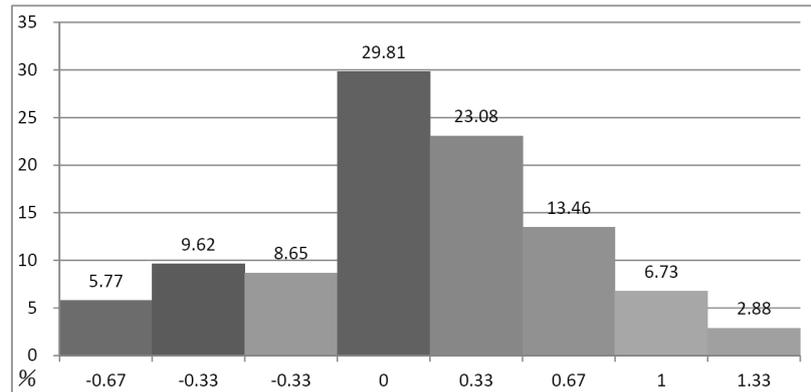
表2 中国大陸へのイメージの変化

		交流前				合計%
		非常によい	よい	悪い	非常に悪い	
民衆への イメージ	交流後	非常によい	0.95		0.95	1.90
		よい		31.43	22.86	54.29
		悪い	0.95	13.33	24.76	40.95
		非常に悪い			2.86	2.86
		合計% (N=105)	1.90	44.76	51.43	1.90
国家指導 者へのイ メージ	交流後	非常によい		0.95		0.95
		よい	2.86	31.43	18.10	53.33
		悪い		6.67	37.14	44.76
		非常に悪い				0.95
		合計% (N=105)	2.86	39.05	55.24	2.86
中国全体 へのイメ ージ	交流後	非常によい		1.92	0.96	2.88
		よい		34.62	31.73	68.27
		悪い		8.65	17.31	26.92
		非常に悪い			0.96	0.96
		合計% (N=104)	0	45.19	50.96	3.85

出典：筆者作成。

上の三問に対する諸数値から、中国大陸へのイメージを構成することができる。一回目のアンケートによる数値の平均は2.43で標準偏差は0.44、二回目についてはそれぞれ2.61と0.44であった。二回のアンケートの各サンプルの平均からt検定を行うと、願望の平均は有意に0.17上がっている ( $p < 0.001$ )。交流前後の平均点数の変化は図2のようにまとめることができる。平均は0.17、標準偏差は0.47である。横軸は-3から3までの値を取り得るが、実際には-0.67から1.33であった。図2からは、24.04%の学生が交流後にイメージが悪い方へ、46.15%が良い方へ、29.81%が変化なしということがわかる。まとめると、大陸訪問後、中国大陸へのイメージがより良くなった学生は、より悪くなった学生より22.11%多かった。

図2 台湾学生の中国大陸イメージの変化



出典：筆者作成。

説明：サンプル数 104。

### 3 自己評価利益の変化

台湾の学生による中国大陸での就業の利害評価が交流前後でどのくらい変化したかを、表3に整理した。大陸市場の展望は明るいと答えた者の割合は、交流前の84.76%と交流後の89.52%を比べると、4.76%増加している。大陸での就業で自分の強みを活かすことができると答えた者の割合は、交流前の58.10%と交流後の65.72%を比べると、7.62%増加している。大陸での就業で出世するチャンスがあると答えた者の割合は、交流前の63.81%と交流後の60.00%を比べると、3.81%減少している。大陸での就業でより高いサラリーが望めると答えた者の割合も、交流前の76.19%と交流後の71.43%を比べると、4.76%減少している。最後に、大陸での就業で競争力を強化することができる答えた者の割合は、交流前の82.86%と交流後の83.81%を比べると、0.95%増加している。

表3 自己評価利益の変化

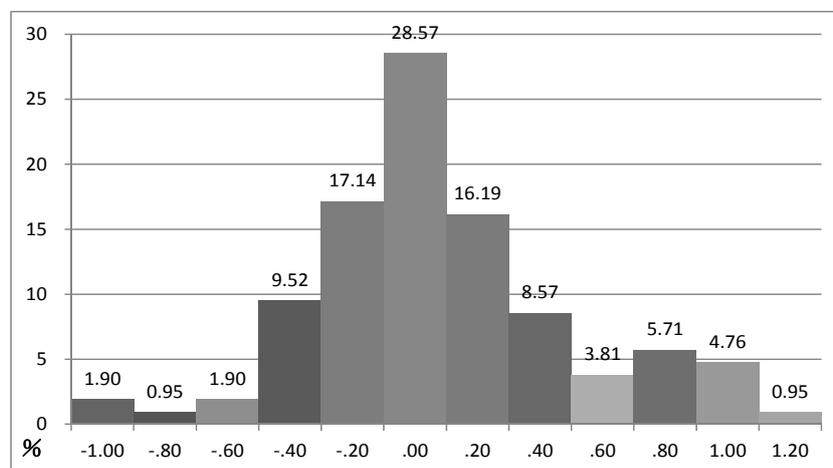
			交流前				
			非常に反対	反対	同意	強く同意	合計%
大陸市場の展望は明るい	交流後	反対	1.90	1.90	6.67		10.48
		同意		10.48	60.95	4.76	76.19
		強く同意		0.95	7.62	4.76	13.33
	合計% (N=105)		1.90	13.33	75.24	9.52	100.00
就業で強みを発揮できる	交流後	反対		22.86	11.43		34.29
		同意	0.95	17.14	35.24	0.95	54.29
		非常同意		0.95	7.62	2.86	11.43
	合計% (N=105)		0.95	40.95	54.29	3.81	100.00
出世のチャンスがある	交流後	反対	0.95	24.76	14.29		40.00
		同意	0.95	9.52	36.19	1.90	48.57
		強く同意			9.52	1.90	11.43
	合計% (N=105)		1.90	34.29	60.00	3.81	100.00
高いサラリーが望める	交流後	反対		15.24	13.33		28.57
		同意		7.62	49.52		57.14
		強く同意		0.95	8.57	4.76	14.29
	合計% (N=105)		0	23.81	71.43	4.76	100.00
競争力が強化できる	交流後	非常に反対		0.95			0.95
		反対		7.62	6.67	0.95	15.24
		同意		8.57	48.57	6.67	63.81
		強く同意			12.38	7.62	20.00
合計% (N=105)		0	17.14	67.62	15.24	100.00	

出典：筆者作成。

上の五問に対する諸数値から、中国大陸での就業の利害評価を構成することができる。一回目のアンケートによる数値の平均は 2.80 で標準偏差は 0.38、二回目についてはそれぞれ 2.88 と 0.49 であった。二回のアンケートの各サンプルの平均から t 検定を行うと、自己評価利益の平均は 0.08 上がっており、統計上有意味なレベルである ( $p=0.046$ )。交流前後の平均点数の変化は図 3 のようにまとめることができる。平均は 0.08、標準偏差は 0.43 である。横軸は-3 から 3 までの値を取り得るが、実際には-1.0 から 1.2 であった。図 3 から

は、31.43%の学生が交流後に低く、40.00%が高くなり、28.57%が変化なしということがわかる。まとめると、大陸訪問後、大陸での就業に対する自己評価利益がより高くなった学生は、より低くなった学生より8.57%多かった。

図3 台湾学生の自己評価利益の変化



出典：筆者作成。

説明：サンプル数 105。

#### 4 大陸での成長願望の変化についての回帰分析

本論文の従属変数、すなわち大陸願望の二回のアンケート間の差は連続変数なので、線形回帰を仮定する最小二乗法 (ordinary least squares, OLS) を用いて、その変化がもたらす影響を測ることができ、表4に示す結果を得た。この回帰モデルはF検定で妥当とされ ( $F=8.23, p<0.001$ )、従属変数に説明力があることを示している。回帰方程式はこの願望の変化の程度が22.71%の変異を説明できており、二つの仮説も支持された。

本論文では性別とルーツ（省籍）を制御変数としているが、従属変数に有意な影響を与えたのは前者だけであった。成長への願望の増加は、単位あたり標準偏差にして男性の方が女性より 0.15 大きく、男性の方が利益を考慮し願望を変化させた可能性が考えられる。ルーツを台湾漢族に持つ者の願望は持たない者に比べると、単位あたり標準偏差にして 0.11 低く、理論による予測と符号はするが、統計的に有意な水準には達しなかった ( $p=0.236$ )。この結果が台湾の青年層の中国大陸に対する態度において、ルーツは考慮しなくてもよい因子であることを示すかは、より多くの実証研究を待たねばならない。

社会的接触の仮説を検証すると、中国大陸へのイメージの変化が単位あたり標準偏差にして 1 増加するごとに、大陸での成長への願望の変化も同様に 0.41 と、統計的に有意な水準だけ上がっており ( $p<0.001$ )、仮説 1 は支持される。台湾の学生は我が家に帰ったかのようにくつろぐことができ、相手の善意を感じたほか、相互に信頼が生まれ、連系のネットワークが打ち立てられたのである。また中国大陸へのマイナスイメージについても、空前の発展を遂げた中国経済に驚愕するなど、自分の目で見たものから変化が起きたのかもしれない。以上のことから、台湾の学生は中国大陸に対する印象を改め、大陸での成長願望を高めたと考えられる。これは社会的接触理論の主張する知悉性接触の影響を支持する結果である。

合理的選択の仮説を検証すると、自己評価利益が単位あたり標準偏差にして 1 増加するごとに、大陸での成長願望の変化も同様に 0.18 と、統計的に有意な水準だけ上がっており ( $p=0.050$ )、仮説 2 は支持される。台湾の学生が台湾の産業の展望を憂慮し、中国大陸の市場の展望が明るいとみるほど、大陸では自分の強みが活かせ、出世のチャンスがあり、より高いサラリーを得ることができ、さらに競



ことと政策上の参照価値を述べる。

本論文では大陸での成長項目を五つに分けた。中国大陸での交流経験は、台湾の青年層の大陸での成長願望を確実に押し上げたが、五つの上昇率を高い順に挙げると、長期居住（20.1%）、就学（13.34%）、就業または起業（12.38%）、結婚（5.70%）、恋愛（3.85%）である。これら五項目を総合した場合の願望の数値は、交流前の平均が2.49で標準偏差は0.45、交流後はそれぞれ2.63と0.55であった。平均値は1～4点の評価で0.14増加している。また、中国大陸へのイメージと大陸での就業に対する自己評価利益でも、平均値はそれぞれ0.17と0.08の増加を見せた。本論文で導かれた回帰方程式はこの願望の変化の程度が22.71%の変異を説明できている。まとめると、中国大陸へのイメージが良いほど、また大陸市場への自己評価利益が高いほど、大陸での成長願望も強いものになる。

上述の結果は、兩岸の民間交流が民意の構造に影響を与えることを、改めて証明した。台湾の学生による大陸での交流をテーマとした先行研究を見ると、一回限りのアンケートを用いた横断的研究では、交流の影響は認知面、すなわち中国大陸へのエスニック的な偏見と刷り込みの減少に限られ、アイデンティティ面における兩岸統一／台湾独立の立場、兩岸統一の可能性、自分は台湾人か中国人かといったアイデンティティに関する見解は変わらないとされた<sup>32</sup>。しかし追跡調査によって交流前後の比較を行うと、統一反対から賛成に転じた者が、逆に反対に転じた者より12.3%多くなっており<sup>33</sup>、「独立指向」者も正味14.29%減少していたのである<sup>34</sup>。本論文で取り上

---

<sup>32</sup> 耿曙、曾于葵「中共邀訪臺灣青年政策的政治影響」、頁46、55-56。

<sup>33</sup> 王嘉州、李侑潔「赴陸交流對臺灣學生統一意願之影響」、頁1-34。

<sup>34</sup> 王嘉州「交流生共識？赴陸臺生統獨立場之變遷」『東亞研究』第46卷第1期（2015年1月）、頁20。

げた独立変数、すなわち中国大陸へのイメージと大陸市場への自己利益評価は、どちらも認知面のものとみることができる。また従属変数（大陸での成長願望）はアイデンティティ面のものとみることができる<sup>35</sup>。よって、本論文の研究結果として、台湾の学生の大陸での交流経験は、認知面・アイデンティティ面両方に影響を及ぼすということが言えるであろう。

上記の結果に対して、台湾政府は中共の対台湾交流システム告知にも寛容であるべきであろう。それは中共に台湾の武力統一ではなく交流を経た統一促進に向けてのたゆまぬ努力を鼓舞することになるからである。もう一方では、台湾政府と学界は大陸への成長願望に影響を与える因子がほかにないか、また交流が政治的見解に与える影響を深く研究し、それに対応する戦略を練るべきである。進んで交流に赴きたがる学生は、そうでない学生に比べて中国大陸への態度を変えやすいのか？可能性としてはあるが、現在のデータでは検証できない。また中国大陸へのイメージの変化にどのような因子が影響を与えるのかということも関心を惹く問題であるが、本論文ではそれを論じるスペースがない。さらに、交流により生じた影響が台湾に帰った後は時間とともに減衰していくということがあるのか、これも本論文の限られたデータでは答えようがない。この三つの問題が今後の研究の目指すべき方向となるだろう。

（寄稿：2017年4月13日、採用2017年6月7日）

翻訳：田中研也（台湾・東呉大学日本語文学科非常勤講師）

---

<sup>35</sup> 大陸での成長願望に属する五項目のうち「就業」と「長期居住」は、中国大陸をホームグラウンドとみて留まり、花を咲かせたいという抱負を表す者で、同化理論のいうアイデンティティ同化 (identificational assimilation) に近い。参考：Mary E. Wilkie, "Colonials, Marginals and Immigrants: Contributions to a Theory of Ethnic Stratification," *Comparative Studies in Society and History*, Vol. 19, No. 1 (January 1977), p. 88.

# 習近平時代赴陸交流臺生生涯規劃之 定群追蹤\*

王 嘉 州

(義守大學公共政策與管理學系教授)

## 【摘要】

太陽花學運後爭取臺灣青年的認同，已成中共對臺政策的首要目標，其創新策略乃透過交流吸引臺灣青年赴陸發展。因此，赴陸臺生生涯規劃變遷乃兩岸關係研究之新興重要議題。本文以 2016 年寒假與暑假赴陸交流團的臺生為研究對象，採用定群追蹤調查法，根據社會接觸與理性選擇理論，分析赴陸臺生生涯規劃之變遷與影響因素。本研究發現：臺生前往大陸交流後的赴陸發展意願，其平均數在 1 至 4 的量表中顯著提升 0.14，22.10%臺生赴陸發展意願變低，52.89%變高，25.00%沒有變化。本文建構的迴歸方程式可以解釋臺生赴陸發展意願變遷程度出現 22.71%的變異。男性、對中國大陸印象變愈佳、以及對大陸市場自評利益變愈佳者，其赴陸發展意願變愈高。

**關鍵字：**太陽花學運、兩岸關係、社會接觸、理性選擇

---

\* 本文乃科技部專題補助研究成果，計畫編號：MOST 105-2410-H-214-002-MY2。

## **Panel Study of Career Planning Among Taiwanese Students Studying in Mainland China During the Xi Jinping Era\***

*Chia-Chou Wang*

Professor, Department of Public Policy and Management,  
I-Shou University, Taiwan

### **[ Abstract ]**

In the wake of Taiwan's Sunflower Student Movement, a primary goal of the Chinese government in its policy towards Taiwan has been to gain a greater identification with Chinese identity among more Taiwanese youths. One innovative strategy the Chinese government has adopted is to attract Taiwanese youths to pursue a career in mainland China through organizing exchange activities. Therefore, studying changes in the career planning of Taiwanese students who have undertaken such exchanges in China have become an important emerging topic in cross-strait studies. This study focuses on Taiwanese students who visited China during the winter and summer vacations of 2016. It employs a panel data investigation based on social contact and rational choice theories to analyze the changes in their career planning and the factors that influenced these changes. The results showed that on a scale of 1-4, the average score of these students' intentions to pursue a career in China significantly increased by 0.14, with 52.89% exhibiting an increased intention and 22.10% a decreased intention, and 25.00% demonstrating unchanged intentions. In addition, a regression model

---

\* This work was supported by the Ministry of Science and Technology, R.O.C. [grant number MOST 105-2410-H-214-002-MY2].

was established to explain 22.71% of the variance in these changes. Specifically, Taiwanese students who were male, gained an improved impression of China, and those whose perceived benefits in the Chinese market had been enhanced showed an increased intention to pursue a career in China.

**Keywords:** Sunflower Student Movement, cross-strait relations, rational choice, social contact

**〈参考文献〉**

- 「上班族西進大陸暨歸臺調查」『1111 人力銀行網站』2015 年 2 月 25 日、[http://www.1111.com.tw/news/surveynews\\_con.asp?ano=72895](http://www.1111.com.tw/news/surveynews_con.asp?ano=72895)。
- 王嘉州「來臺陸生統一態度變遷初探—政治社會化途徑與定群追蹤法之分析」『臺灣民主季刊』第 9 卷第 3 期（2012 年 9 月）、頁 85-118。
- 王嘉州「交流生共識？赴陸臺生統獨立場之變遷」『東亞研究』第 46 卷第 1 期（2015 年 1 月）、頁 1-33。
- 王嘉州「中共推動兩岸青年交流政策評析」『亞太評論』第 1 卷第 6 期（2015 年 11 月）、頁 73-91。
- 王嘉州、李侑潔「赴陸交流對臺灣學生統一意願之影響」『社會科學論叢』第 6 卷第 2 期（2012 年 10 月）、頁 1-34。
- 王嘉州、劉羿朋「交流化獨或煙火效應？赴陸臺生統獨立場之持續與變遷」發表於「民主與治理的挑戰」研討會（地點：臺灣政治學會、國立金門大學、2015 年 11 月 14-15 日）、頁 1-18。
- 耿曙、曾于蕤「中共邀訪臺灣青年政策的政治影響」『問題與研究』第 49 卷第 3 期（2010 年 9 月）、頁 29-70。
- 張振成「生涯規劃與生涯發展」『諮商與輔導』第 144 期（1994 年 12 月）頁 24。
- 張添洲『生涯發展與規劃』（台北市：五南圖書、1993 年）。
- 陳陸輝、耿曙、涂萍蘭、黃冠博「理性自理或感性認同？影響臺灣民眾兩岸經貿立場因素的分析」『東吳政治學報』第 27 卷第 2 期（2009 年 6 月）、頁 87-125。
- 陳德昇、陳欽春「兩岸學術交流政策與運作評估」『遠景基金會季刊』第 6 卷第 2 期（2005 年 4 月）、頁 35-82。
- 陳鍵興「習近平總書記會見宋楚瑜一行」『新華網』2014 年 5 月 7 日、[http://news.xinhuanet.com/politics/2014-05/07/c\\_1110577861.htm](http://news.xinhuanet.com/politics/2014-05/07/c_1110577861.htm)。
- 湯晏甄「『兩岸關係因素』真的影響了 2012 年的台灣總統大選嗎？」『臺灣民主季刊』第 10 卷第 3 期（2013 年 9 月）、頁 91-130。
- 黃惠惠『我的未來不是夢：生涯發展與規劃』（臺北：張老師、2004 年）。
- 楊婉瑩、劉嘉薇「探討統獨態度的性別差異：和平戰爭與發展利益的觀點」『選舉研究』第 16 卷第 1 期（2009 年 5 月）、頁 37-66。
- 楊開煌、劉祥得「社會接觸及政治態度影響臺灣民眾對大陸印象、認知、政策評估之分析」『遠景基金會季刊』第 12 卷第 3 期（2011 年 7 月）、頁 45-94。
- 潘薇、陳翠仙「個體戶條件鬆綁 臺商搶攻對岸內需財」『聯合新聞網』2017 年 1 月 26 日、<https://udn.com/news/story/6867/2252303>。
- 聯合報系民意調查中心「兩岸互動 16 年 台灣青年關鍵 7 變」『聯合報』2016 年 11 月 20 日、<https://udn.com/news/story/10599/2117317>。
- Allport, Gordon W., *The Nature of Prejudice* (Cambridge, MA: Addison-Wesley, 1954).

- Dowding, Keith, and King, Desmond, eds., *Preferences, Institutions, and Rational Choice* (Oxford: Clarendon Press, 1995).
- Gordon, Milton M., *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins* (Oxford and New York: Oxford University Press, 1964).
- Hamberger, Jürgen, and Hewstone, Miles, "Inter-ethnic Contact as a Predictor of Prejudice: Tests of a Model in Four West European Nations," *British Journal of Social Psychology*, Vol. 36, Issue 2 (June 1997), pp. 173-190.
- Lau, Richard R., and Heldman, Caroline, "Self-Interest, Symbolic Attitudes, and Support for Public Policy: A Multilevel Analysis," *Political Psychology*, Vol. 30, No. 4 (July 2009), pp. 513-537.
- Pettigrew, Thomas F. "Intergroup Contact Theory," *Annual Review of Psychology*, Vol. 49, Issue 1 (February 1998), pp. 65-85.
- Powers, Daniel A., and Ellison, Christopher G., "Interracial Contact and Black Racial Attitudes: The Contact Hypothesis and Selectivity Bias," *Social Forces*, Vol. 74, Issue 1 (September 1995), pp. 205-226.
- Riker, William H., "The Future of a Science of Politics," *American Behavioral Scientist*, Vol. 21, No. 1 (September/October, 1977), pp. 11-38.
- Sears, David O., Lau, Richard R., Tyler, Tom R., and Allen, Harris M. Jr., "Self-Interest vs. Symbolic Politics in Policy Attitudes and Presidential Voting," *American Political Science Review*, Vol. 74, No. 3 (September 1980), pp. 670-684.
- Super, Donald E., "A life-span, life-space to career development," In D. Brown, L. Brooks, and Associates, eds., *Career choice and development* (2nd ed.) (San Francisco: Jossey-Bass, 1990), pp. 197-261.
- Wilkie, Mary E., "Colonials, Marginals and Immigrants: Contributions to a Theory of Ethnic Stratification," *Comparative Studies in Society and History*, Vol. 19, No. 1 (January 1977), pp. 67-95.

